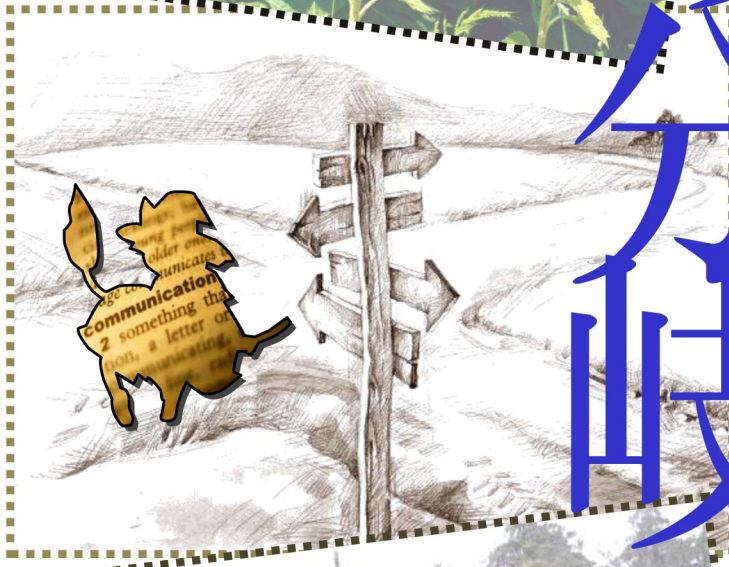


# 老いたる徴と 風の分岐



ねえ、メリー。知っている？ 博麗神社のこと。

なあに？ これ。ずいぶんおんぼろな建物ね。

大昔、結界を隔てる場所に建てられたっていう  
神社らしいのよ。

へえ。  
……でも、そんなもの本当にあるのかしら？

本当にね。この時代に、そんなの眉唾よね。



——もうおしまいだ！

なにがなんだが、わからぬ！！

蝉の声も五月蠅いある夏の日のことだった。

神社の縁側で霊夢と一緒に溶けるように寝そべり、棒アイスで頬張っていたところへ汗だくになって駆け込んできたスキマ妖怪の式、八雲藍は、すっかり取り乱した様子でヒステリックにそう叫んだ。

それが、幻想郷崩壊のはじまりだった。

今更ながらに思い返してみれば、前兆みたいなものはかなり前からあったのかもしれない。あの、六十年に一度の結界騒ぎを最後に、もう長いこと異変らしい異変も起きていなかったし、新顔とも滅多に顔を合わせることもなかった。霊夢は相変わらずぐーたらで、パチュリーは喘息が治らないとこぼし、アリスは人形を弄り回してばかり。

図書館で借りた本を読み、たまに出かけ、森に茸を採りに行

って、魔法の実験を繰り返して、夜には仲間を集めて宴会。喧嘩が起これば弾幕で白黒をつける。

私の日常は呆れるくらいいつも通りで、だからこそ私がそれを聞かされた時も、『ああ、そうなのか良かったな』と間抜けな顔をするくらいが精々だった。

たぶん、聡い何人かは気付いていて、それでも口には出さなかったのだらう。その頃には幻想郷の崩壊はもうどうしようもないくらいに進んでいて、解決どころか逃げる算段をするのも馬鹿馬鹿しいような状況だった。

騒動の発端となった——というよりは、既にもう手の尽くしようにもないところまで進行していた事態を詳らかにした。ただなのだから、発端というよりは最終告知みたいなものかもしれないけれど——藍も、ずっと前からその聡い頭脳でそれを知っていたのだらうし、確信するよりもずっと昔から、兆候を覺っていたのだらう。

おそらく一人で直面し、それに耐え、悩み、解決のために奔走して、それでもなお全てが叶わないことを知り、ついにそんな暴挙に出してしまったに違いなかった。

それくらい、幻想郷の終焉は決定的で、絶対的で、無慈悲なまでに不可避のものだったのだ。

これが多分、妖怪の賢者八雲紫の消失したとか、楽園の巫女である霊夢の死（あいつはたとえどんな方法で殺したって死なな

いとは思いますが、まあ言葉のアヤだ。衝撃的な事件から始まっていたのなら、この局面はもつと早いうちに発覚していたんだろ  
うし、なにがしかの対処をすることも（覚悟を決めるとか、受  
け入れられずに泣き喚いて暴れるとか、自暴自棄になつて諦め  
るとか）できただろう。

もしも。幻想郷の最後がこれまでに起きた数々の異変や事件  
とは似ても似つかない、血腥く欲望に汚れ、寒々しい絶望に満  
ちたものだったとしても、少なくともそれが現実のものとなる  
まで、抗おうとする自由や時間は与えられていたんだろうと思  
う。

けれど私達にそんなものは全く残されていなかった。

脈絡なく、理屈なく、理由もなく、ただ、幻想郷は終わつて  
いったのだ。

幻想郷に訪れた終焉の正体とは、忘却だった。

表向きには何の異常もなく、ただある日、唐突に、最近誰か  
に会っていないなということに気付く。そして次にはそれがいつ  
つからなのか分からなくなっていることに、さらにはそいつが  
どんな奴だったのかも分からなくなっていることを思い出すの  
だ。

そして、それが一人だけじゃなく、ぞつとするほど大勢にな  
っていることも。

後の紫の言葉を借りるなら、これは、永遠の幼年期の終わり。

東の果ての楽園として作られた幻想郷が、もはや誰にも必要と  
されなくなったために起きた事態なのだそう。

幻想となったものが流れ着く場所すら、外の世界は忘れ去つ  
てしまった——ということらしい。

法則性があつたのかどうかは良く解らないが、私の場合、姿  
を消していったのは、それまで気にかけていなかった者たち  
ばかりだった。道で会つても挨拶どころか、そこにいたのかも  
分からないような——そんな連中から順番に、私の幻想郷は失  
われていった。

私が生きた事実には、もうどうしようもないくら  
い、幻想郷はその姿を変えていた。

最初、私はそれを誰かの起こした異変だと考え（ごく自然な  
思考だ）、心当たりの在りそうな人妖を探して回ることにした。  
けれどそれはすべて徒労に終わり、結局、藍の言っていたこと  
は正しかったのだと思ひ知ることになる。

もう、なにもかもおしまいだ、と。

この異常事態が明らかにした時。妖怪の賢者、八雲紫は早々  
に諸手を挙げ、幻想郷の終焉が近いこと、自分はそれに対抗す  
るすべを持つていないこと、最後までただ傍観することを宣言  
した。

おそらくこの騒動に一番近いはずの神隠しの主犯があつさりと言を否定したことは、かえって周囲の疑念を招いた。最初に無実を主張する奴が真犯人なんて話はよくあることだし、仮にこの危機が事実であつても、おそらく八雲紫ならなにかの対策を取っているだろうという、半ば期待めいた願望もあつたことは否めない。かく言う私もその一人だつた。

しかしそんな多くの連中も、やがて考えを改めざるを得なくなる。紫は自らの言葉通り、ついに最後まで何もせず、終焉を受け入れていったからだ。

### 結局

私達が何かできることなんて、在りはしなかったのだろう。忘れられてゆく者たちが、それを忘れようとしている者たちに声をかけることができるはずもなく、幻想郷の崩壊は、どこまでも穏やかに、静かに、確実に進んでいった。

人里はあつたりと失われたが、阿求は案外しぶとく残つていた。誰にも読まれないかもしれないと自嘲しながら、幻想郷最後となる異変を天狗と一緒にまとめたりしていたのだから、案外と阿礼乙女が短命だなんてのは嘘っぱちかもしれない。

白玉楼の幽霊たちは、意外な事に失われることを恐れ、みつともないくらいに取り乱れていた。死んでなお残るあいつらにとって、未練というのがどれだけ大事なもののかを、私は知つた。残念な事にその経験を生かす機会はない気がしたけれど。

聞いた話では、竹林の奥の永遠亭なんかはまた、辛うじて形を保っているらしい。以前のそれとはまったく姿を変えているようだが、兎達は自分の住む居場所が残されていることに感謝しながら日々を送っているという。

やけに肝が座っていたのはレミリアたちで、消える前に最後に会つた時には、そろそろ引越そうと思つているなんて話をしていた。案外薄情なものだとは思いましたが、あいつらしいと言えばそうなんだろう。

会えなくなる前にもう一度、一緒に呑もうぜと約束をして、結局その『次の機会』は一度もやってきていない。

そう言えば、霊夢もいつのまにか姿を消していた。

あいつのことだ、死んでいるとも思えないし、どうせどこかでのんびりとやっているんだろう。

前に、霊夢と今生の別れをすることになったら自分はどうするだろうと、いろいろ湿っぽいことを考えてみたことがあつた（明日世界が滅んだらどうなるとか、まあそんな感じの、夜、眠れないときなんかにしてみる乙女らしい想像だ）ものだが、いざ実際にそうなってみると案外、なんとも感情が浮かんてこない。

もう会うことはないのかもしれないが、仮に奇跡みたいなことが起きてそれが叶つたとして、たぶんいつものように挨拶をして、適当に駄弁つて、お茶を飲んで、別れるのだろう。

どうも、自分で考えていたよりもずっと、あいつとの距離は特別だったらしい。

嘆く事もできないくらい、いつまで経つてもいつも通りなんて、なかなかない経験だろう。あいつは人との距離を測るのが致命的に下手くそで、信じられなくなるくらい上手かったから、たぶんどのいつも同じように感じているはずだった。

そして——私だ。

結局 失われたものがどうなっているのかよく解らないから、案外私もとくにどこかで失われてしまっていて、それに自分が気付いていないだけかもしれないし、そうでなくとも他の連中にしてみれば、失われているのは私のほうなのかもしれない。けれどまあ、とりあえず今日も朝は来るし、腹は減るくらいには今の私は平常運転だ。

箒の上から見下ろす幻想郷は、もう虫食いのようにぼろぼろで、在りし日の姿は窺うべくもない。辛うじて残っているのは人里と、おぼろげな地形くらいだ。

気付けば箒の上から挨拶をする見知った顔もめつきり減つて、出入りする図書館も、お茶に寄る同じ森の邸宅も失くして。

——ごっそりと消えてなくなった魔法の森からも追い出されて、今、私は香霖のところに居付いている。

こんなご時世だったのに相変わらず売れない道具屋を続けて

いる益暗な店主は、もともと客の来ない店からさらに客足が遠のいたとか、正気を疑われても仕方のないような冗談を言っていた。

けれど今は。

そんな、朴念仁なあいつの声を聞いていられるのが、少しばかり、ありがたく思えた。



朝の光、鳥の声。冷えた夜が陽射しに温まり、草木が梢を揺らして、吹き抜ける風を見送る。

僕の日々は呆れるくらいに穏やかで、それまでの日常とまるで変わっていない。

けれど、幻想郷がゆるやかな、そして決定的な終焉を迎えていることは間違いない、それを示すように来店する者たちの数も減っていた。

「……これで足りるかな」

「ええ。十分です」

肩上で揃えた髪を揺らし、ぺこりとお辞儀をして、阿求は注文の品——多くが紅茶、珈琲等の嗜好品た——を受け取った。

かつてこの店にこれらの品を求めるのは、人の身で広大な悪魔の館を一人で切り盛りする瀟洒な侍女長であつたはずだが、もはや湖の傍に放棄された紅い館にこれを求める者はいない。

一人で持つには少々多すぎるそれを、苦勞して持ち上げ、阿求はややおぼつかない足取りで椅子を立つ。

難儀な事だねと労うと、彼女はわずかに微笑んだ。

「次はいつ来れるか分かりませんからね」

はにかむようにもう一度礼を述べて、九代目の阿礼乙女はよたよたと立ち上がる。いまや彼女は僕の店にとつての僅かな常連客の一人であり、幻想郷に残る少ない人間の一人である。

人里が機能しなくなつてなお、彼女は邸にひとり残り、日々出歩いては書をしたためているという。たまに彼女に随行する天狗の姿を見るので、まあ達者になっているのだらうなと思う。

もう読む者もおらず、意味のない幻想郷縁起だが、その補填を書き綴ることに躊躇いはないようだ。

御阿礼の宿命か、義務感か、あるいは彼女自身が己に課した責務か。僕などはいつ悲観的な想像をしてしまふのだが、彼女は存外そんな毎日を楽しんでいるようだった。案外と、彼女こそ自分の立つ場所に揺るがぬ価値を見出しているのかも知れない。

「そう言えば、あれはどうなりました？」

「またその話かい」

彼女の問いには苦い顔をすくれない。僕が随分前に書こうと思つていた本は、最初の数行を書き出したところで筆が止まつてしまっている。

ここを頻繁に訪れていた、紅白の巫女が姿を消して以来。

「新しく読める本も少なくなりましたしね。機会があればぜひ、目を通していただきたいのですよ」

「——善処しよう」

曖昧に口を濁した僕に、阿求はそれ以上を踏み込むこともなく微笑み、失礼しますとだけ告げて、店を出てゆく。

「——ん、誰か来てたのか、香霖？」

玄関で彼女を見送っていると、奥から、ぼさぼさの髪を揺らして魔理沙が顔を出す。

肌蹴た胸元に手を突っ込んでぼりぼりと掻き、大口開けての大欠伸。ところと定まらぬ目元を見ると、また午睡でもしていたのだろう。服は袖と裾に大きく皺が寄っていた。僕が阿求の来訪を告げると、魔理沙はしかめつ面をして口をへの字に結ぶ。

「なんだ薄情な奴だな。挨拶くらいしてればいいだろうに」

「彼女なりに気を使っただろうさ」

実際、買い物に来た店先ならともかくも、家の奥にまで上がり込んで寝ている相手を起こすまでの傍若無人は避けるものだろう。魔理沙基準ではそれが普通なのかもしれないが、それを彼女に要求するのは難しい。

「今更知らん中じゃないし、水臭いじゃないか」

「そんなに言うなら、君のほうから訪ねてやればいいのじゃないかな」

何気なく言ったつもりだったが、魔理沙は急に顔をしかめ、ももごと口籠りながら、奥へ引っ込んでしまう。

僕は何か拙いことを言っただろうかと首を捻るが、どうにも

見当がつかなかった。

\*Hello, Hello, Do you read?

幻想郷の変貌と共に、多くの者達がその有り様を変えていった中で、魔理沙もまた自分の居場所を変えていた。魔法の森が消え失せて、住まいを失った彼女は、ほとんど着のままで僕の店に転がり込んできた。

おそらく、いつもそんな調子なのだろうことを窺わせる強引さで店の裏手にあった倉庫を占領し、僕の集めた商品をがらくたと言いつつ押し付け、魔理沙は持ちこんだ布団と家具を並べ、自分の部屋にしてしまった。

何度か出ていくように言ったが、聞き入れる様子もなかった。最終的に放置することに決めた。

「僕がこの店を持つにあたって、霧雨の親父さんから君を住まわせることはないようにと念を押されたのだけだね」

「へえ、親父も少しは見る目があったんだな。ま、いまさら許可もへったくれないだろ。大人しく諦めろ、香霖」

魔理沙もそれを良いように解釈したらしい。

うちにきてしばらくは、店の一角に勝手に作り上げた自称工



房で、茸を刻んだり煮詰めたり火を点けて火事を起こしかけたりと、忙しく日々を繰り返していたが——森がなくなつて以前のように茸も手に入らなくなり、弾幕の相手にも事欠くようになってからは、八卦炉も卓の隅に埋もれて埃を被るばかりとなっている。

魔法の実験にも身が入らないと見えて、今では店の隅で日がな一日、ぼうつと空を見上げることがほとんどだ。たまの来客があればいつも通りの様子であれこれと、年頃の少女らしいお喋りに花を咲かせるが——いまや魔理沙が訪ねていける先は、ほとんど残されていない。

彼女を相棒として空を自在に舞い飛んだ筈は、部屋の隅で蜘蛛の巣をかぶり、静かに朽ち始めていた。

トレードマークの三角帽と白黒の魔女服に袖を通す事もなくなり、今では人里に卸す予定だった若い娘向けの服を寝巻に愛用している。癖の強い金髪は和装とあまり相性が良くないようで、魔理沙は良くそれを嘆いていた。

「——またそんな恰好で、風邪をひくよ」

「……………ん」

上の空で、窓の外を見上げる魔理沙の横顔は、かつての僕が知る普通の魔法使いのそれとは似ても似つかない。細かった手足がしなやかに伸び、襦袢の裾が乱れるのも気にしないその姿に、僕が誰かを重ねてしまっていたことに、たぶん、彼女も気

付いていたのだらうと思う。

今にして思えば、一度、こうなる前に霧雨の親父さんのところには顔を出しておくべきだったのだらう。

けれど、断りもなく魔理沙を居候させているという事実が、なんとなく僕の足を人里から遠ざけているうちに——いつしかそれも無理な話となつた。

恩人に別れを告げることもできなかった後悔の中で、僕は自分の不義理を恥じた。

疚しい気持ちがあつた訳ではないけれど、少なくとも心のどこかでは安堵していたことは確かだったから。

「——そうか、親父が」

魔理沙はその報せを聞いても、特に取り乱す様子もなく、少なくとも表面上はいつも通りを貫いていた。

魔法の森に彼女が設けたあの古びた一軒家——魔理沙自身はよろず魔法事解決専門、霧雨魔法店と呼んで憚らないが——こそは、家を飛び出し魔法を修めることを誓つた、霧雨魔理沙を形作る要素であつたはずだ。

それが欠けた彼女は、かつての霧雨魔理沙ではない。霧雨家の令嬢として蝶よ花よと育てられていた彼女がもうどこにもいないように。普通の魔法使いだった魔理沙も、もうこの幻想郷には居ないのかもしれない。

——否。

かもしれない、という曖昧な表現は避けねばならない。

僕の目は既に、霧雨魔理沙の『機能と用途』がかつての普通の魔法使いだった頃の彼女のものではなくなっていることを知っているのだ。

幻想郷は破綻した。

霧雨魔理沙は、弾幕に興じることも、巫女に競って異変を解決することも、もうない。

\*HelloHello, Do you read?

梅雨に入っすぐの、ある夜のことだった。

空を分厚い雲が覆い、篠突く雨が窓を叩く中、不意に背中が物音がした。

立つのが億劫で、灯りを消したままの薄暗い部屋へ、押し開けられた裏口の戸から、雨交じりの冷たい風が吹き込んでくる。箆っていた湿気が、雨の匂いに消されてゆく。

「魔理沙——」

傘も持たずに出かけていった彼女を案じて振り向こうとするよりも早く。

濡れた足音を響かせ、僕の背中にどすんと、小さな身体がぶ

つかつてくる。

ばしやりと、水を吸って型崩れした、余所行きのバッグが床に落ちる。背中にはじわりと広がる雨の感触。

「——神社、なくなってたぜ」

「そうかい」

今さら驚くようなことではないだろう。主を欠き、結界の意味もなくし、あの神社が今もまた形を保っていることのほうが、余程驚きだった。

「本当に、無くなったんだな。店も、蔵も、親父の部屋も、爺様の離れも、」

小さく、緊張に息を強張らせる音が聞こえる。

濡れ鼠のまま、魔理沙は僕の背中から、腰に手をまわしてくる。

絶るように。乞うように。求める、ように。

「なあ、香霖」

雨に濡れた魔理沙の手は、酷く、熱を帯びていた。

「嫁さん、欲しくないか？」

それは長らく僕が考えたこともない問い掛けだった。半妖の自分にとって、伴侶を得るということは酷く非現実的過ぎて、まったく予想外の質問だったのだ。昔、まだ自分が人と人でないものを区別できないくらいに幼かった頃にはそんな願いを抱いたことがあったような気もする。

けれど、それはもう随分と前の事で、もうおぼろげな記憶にもなっていないかった。

「……………」

雨音が強まる。軒から滴る雫が雨襖を叩き、澄んだ音を響かせている。

開け放たれたままの裏戸から、雨はなお風と共に吹き込んで、提げたままの風鈴を五月蠅いほどに鳴らしていた。

僕が長いこと、返答に詰まっていると——やがて魔理沙はぐりぐりと背中を擦りつけてくる。少し力任せに握りしめられた指が、わずかに痛かった。

「——そうか、やっぱ、お前はそういう奴だよな」

どん、と。心持ち強めに、背中が叩かれる。

魔理沙の小さな拳が、何故かが強く、胸の芯に響いた。

僅かに震えた声を絞り出して、魔理沙はすぐに僕から離れた。

「ちよつとした気の迷いだ、忘れてくれていいぜ」

照れ隠しのように笑っていたその目元が、何度も擦ったように赤くなっていたのが印象的だった。

それから、僕は濡れ鼠の魔理沙を風呂に押し込み、遅い夕食の用意を始めた。久々に腕を振るったつもりだったが、魔理沙は塩が多いだの、出汁の取り方が甘いだのと、散々に文句をつけた。

たぶん、僕は魔理沙を傷付けたのだろっけれど。

僕はそれに気付かないように振舞った。本心を偽るのは商売人の端くれとして慣れていたから、難しいことではなかった。

*\*Hello, Hello, Do you read?*

次の日から、魔理沙は急に忙しく動き始めた。

「よう、どうした香霖、遅いぜ」

まだ日も昇り切っていない時刻から、裏庭で物音がするので覗いてみれば、久しぶりにあの、白黒の服に袖を通した魔理沙が、庭の隅に積み上げていた商品を——多く、ここを訪れた少女達はガラクタだと評したが——引っこ掻き回していたのだ。

それは売り物だと僕が顔をしかめると、魔理沙は僅かに口元を緩め、スカートのポケットから何かを放り投げてみせる。

慌てて手にしたそれは、質の良い金の鉱石だった。

「売り物ならもう少し大事にしまっておけよ。このまま放つといて、私以外に買いに来るやつがいるのか？」

取引成立だとはかり、魔理沙は再度作業に没頭し始める。

巾着一袋の鉱石では代金には少々不足していたが、僕はそれを黙っていることにした。

僕が魔理沙を傷付けたことは間違いない、てつきり塞ぎこむ

と思つていただけに、拍子抜けしたことは否めない。魔理沙はそんな僕の驚きを敏感に覺つたらしい。

「乙女心は複雑なんだぜ。色々とな」

白い歯を覗かせる彼女を見て、僕はもう何も言うまいと決めていた。

——何事にも突然ではあるけれど、そうやって決心を決めた後の魔理沙の行動は早い。

かつて彼女が実家を飛び出し、魔法の森に棲みかを定めた時のように。

それまで毎日ごろごろと怠け、呆けていたのが嘘のように、魔理沙は寝る間を惜しんで作業に没頭し始めた。

とても一朝一夕で実行に移せるような類のものではなく、もうずっと前から——おそらく、僕の店に居付くよりも前から、思案し続けていたことに違いなかった。

魔理沙がまず目を留めたのが、雨曝しになつていた緑の屋根の乗用車だ。

僕が文献で読む蒸気自動車とは違い、ガソリンという揮発燃料を燃やして走る車だというのが——魔理沙はそれを引っ張り出して、危なっかしい手つきで解体を始めたのだ。機械じじりのイロハは前に本で読んだというが、ボロボロのノートを傍らに、危なっかしく工具を握り導線を繋ぎ合せる様はどうにも心許ない。

油で汚れた手袋で鼻を擦り、なんども導線を千切つては繋ぎ直し、真剣な顔で調整を繰り返す。何かが強く擦れるような音がするので様子を見に行けば、電線をショートさせて目を回している彼女の姿を見つけることも一度や二度ではなかった。

「夕飯、冷めてしまうよ」

「んー？ ああ、置いといてくれ。後で食う」

店を閉める僕にも、声だけでそう答えて、魔理沙は飽きることなく、作業を続けていた。深夜まで及ぶことなど知らず、二日三日続けての徹夜も少なくない。

たまに顔を挙げたかと思えば、

「香霖、これからちよつと出かけてくるから、飯は要らんぜ。たぶん朝までには戻る」

雨が降つていようが構わずに、言うなり店を飛び出してゆく。店に住むようになってからは蜘蛛が巣をかけるくらいしか役に立っていなかった愛用の箒を引っ張り出し、曇天の空へ飛び立ち——そのまま次の日。夕焼けの空を背に、時には真夜中になるまで帰つてこないような事も増えた。

そういう時、彼女はきまつて大荷物を抱えていた。たまに疲れきった様子で手ぶらに戻り、倒れ込むように軒をかき始めることもあった。

恐らく心当たりのある場所へ、資材の調達に行つていたのだろう。それをした次の日から数日は朝から晩まで裏庭で油にま

まれて機械いじりをするのがほとんどだった。

やがて、彼女の作業場所はいよいよ広い場所を占め、店の裏庭から表へと移り、そこに鉄骨と針金を組み合わせた奇矯な芸術作品を組み上げてゆくにいたった。

これでは客足が遠のくと言った僕に、

「嘘つけ、元々寂れ放題だったじゃないか」

魔理沙は悪びれもせずそう答えた。

水捌けの悪い雨の日は庭が水浸しになるので、古いビニールシートを出して屋根を作り、その上に魔法をかけたシダの葉を乗せて雨よけにする。

細い糸のような鋼線を背の高い木の間に張り巡らせ、絡めつけては巻き尺を広げて長さを、磁石で方角を確認し、伸ばした色とりどりのコードを機械に繋いでゆく。

危なっかしい手付きだったはんだ付けはそのうち堂に入ったものになり、手帳を見て頭を抱え込んだり、上手くないかいないかとに文句を並べることも少なくなった。

いなくなった相手に愚痴をぶつけるよりも、彼女には試行錯誤をしている方が性に合っているのかもしれない。

魔理沙がしているこれは、彼女の魔法と同じものだ。

ずっと魔理沙は一人で、こうして自分だけの魔法を積み上げてきたのだろう。それを全て放り捨て、けれど魔理沙はやはり魔理沙のままだった。霧雨魔理沙の根っこは揺らぐものではない。

く、ずっとあの魔法の森に根付いていたのだ。

その様を、かつての彼女は決して外に見せようとはしなかった。誰よりも諦め悪く、足掻く様を見せることを由としていなかった。僕をその例外としてくれた理由は、形振り構っている余裕がないためか、今更取り繕っても仕方がないと思っているのか、あるいは――

いや、よそう。僕にそれを論じる資格は、もう無いのだ。

魔理沙は一度も僕に手伝えとは言わず、僕も一度も彼女を手伝おうとは言わずにいた。

それでも、朝夕の食事だけは、一緒に過ごした。

*\*Hello, Hello, Do you read?\**

「――できた!!」

夏も近い、七月の初めの日。

久方ぶりの明るい声に、僕は見聞していた茶器を片づけ、店の裏口から外へ出る。

そこにはますます複雑に、巨大になった魔理沙謹製のがらくたがあった。

金属と材木を組み合わせたフレームには、まるで帆のように

大きく空に広げた白い布が縫い止められている。蛇のようなコードがそこらじゅうを埋め尽くし、むつとするほどの熱気を上げる。あちこちでは見たことのない計器が針を動かし、ちかちかとランプを点滅させていた。

低く獣が唸るような重低音が途切れることなく続き、菜種油を精製した燃料を燃やして黒い煙を上げる発電機が、うるさいほどに鳴り響いている。

本当は、僕には分かっていた。魔理沙が裏庭で何を始めたのか。何をしようとしていたのか、何を作ろうとしていたのか。勿論、彼女が弄り続けていたガラクタの山は、道具の体など成してなくて、機能などありはしなかったが。

だからその日は、全くの驚きだった。——偶然か、奇跡か、あるいは彼女の愚直なまでの努力の積み重ねが、ついに実を結んだのか。

僕の目にも分かるくらい明瞭に、魔理沙が裏庭に組み上げた『それ』がその用途を示したのを、僕は理解していた。

僕の様子に気づいて、魔理沙も笑った。煤けた顔を拭い、裏庭に組み上げられた、鉄骨と針金を組み合わせた基盤とコードの塊の中からずると黒い箱を引きずり出して、いくつものスイッチやダイヤルを弄りはじめる。

乗用車のスピーカーが、砂の擦れるようなノイズをあげ、きんきんと甲高い音を響かせる。五月蠅そうに耳を塞いだ魔理沙

が乱暴に筐体を叩くと、雨音のように続いていた騒音が、一瞬だけ途切れ、ぷつ、と静音が聞こえる。

「……………」

一度だけ僕のほうを見てから、魔理沙はマイクを手取る。固い唾を飲むと、彼女はいつもの調子でこう言った。

「ハロー、ハロー、こちら幻想郷。

……まだ生きてるやつ、いるか？」



「——なんだ、そこにいたのか。」



【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『老いたる徴と風の分岐』は、終焉を迎えかけた幻想郷で、なお普通の少女として生きる魔理沙の生き方なんかについて書いた、当サークル十九冊目のSS本となります。

かなり変則的で読む人を選ぶ内容となっていました。背景情報をできるだけ排そうとした結果、何が何やらわからなくなっている印象もあります。

おそらくこのお話は、花塚から風神録に至るまでの、あの何とも言えない末世を感じることができた東方界限の中で書かれていなければならなかったもので、おそらくこれから先にも正しく書く機会があるのかどうか分からないものです。

リセットが風説として囁かれ、幻想郷の在りようが大きく変わってしまいそうに、あるいはそこで断絶してしまいそうに思えたあの当時に、自分はまたサークルとしての参加をしていませんでしたが、それを少し寂しいと思う気持ちがあります。今回、いくつか思うところがあったそれを形にしてみました——少しでも伝わるころががあれば嬉しい限りです。

今回、初の試みとして本文の挿絵を、いつもお世話になっている白身氏にお願いしました。急なスケジュールの中素晴らしいイラストをありがとうございます。

また、mixiサイトの監修など、Riz a氏には様々な形でお世話にな

りました。この場を借りてお礼をさせて頂きます。

—— それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

「老いたる徴と風の分岐」

平成24年7月1日

恋のまほうは魔理沙におまかせ！ 4

オルハザカサンパンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 あかがね 銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の

「東方 project」の二次創作です。





Greetings from the Edge of the Xanadu.

"Hello, Hello, Do you read?"